

土壌の水分不足による収量低下が懸念されます。 可能なほ場では干ばつ対策を実施しましょう。

大豆は、開花期から登熟初期にかけて、多量の水を必要とします。

この時期の干ばつは、収量・品質に直結するダメージとなります。水が利用できるほ場では、適切に水分を補給しましょう。

●うね間かん水を行う干ばつのめやす

- ・土壌表面が乾燥して白乾亀裂を生じているとき。
- ・大豆の上位葉が裏返ってみえるとき（水分が少なくややしおれる）。
- ・開花期から約2週間が特に効果的（右図）。

●かん水方法

30a規模のほ場では3日間に分けて徐々にかん水する（下図）。

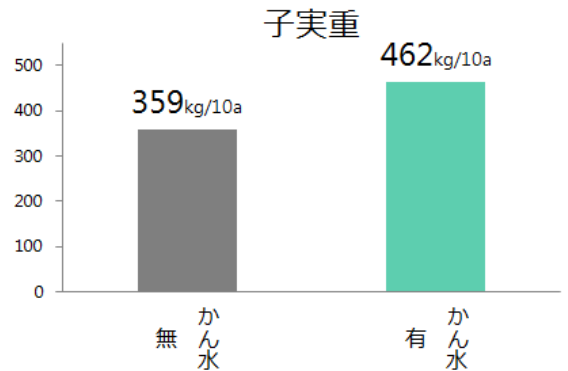
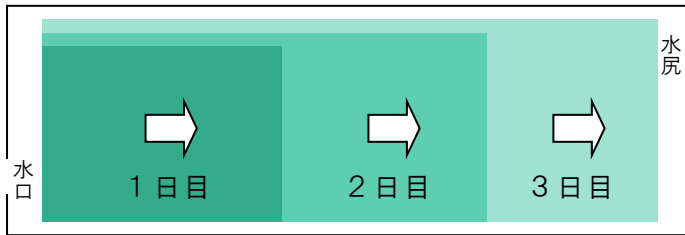


図 うね間かん水の効果 かん水は開花期～莢伸長期（1973山形農試最上分場）

※注意点

- 1 過度のかん水は湿害を招き、かえって収量にマイナスとなるので絶対避ける。
- 2 適期に中耕培土を行い、水路とする。
- 3 高温時に入水すると根が傷むため、夕方の涼しい時間帯に入水する。
- 4 入水後は速やかに排水する。また雑草が増加するため、除草剤による対策を行う。

【地下かんがいが可能な場合】

●地下かんがいをを行う干ばつのめやす

開花期から登熟初期には降雨が少ない場合が多いので、うね間かん水のタイミングより早めにかんがいを始める。土壌にある程度水分がある状態からの開始により、用水の節約と均一な調節が可能。

生育期間中、水位に大きな変化を与えると減収することがある。

●かんがい方法

地下水位を40～50cmにあわせ、開花期～登熟初期の期間中制御する（この水位での多収事例が多い）。

